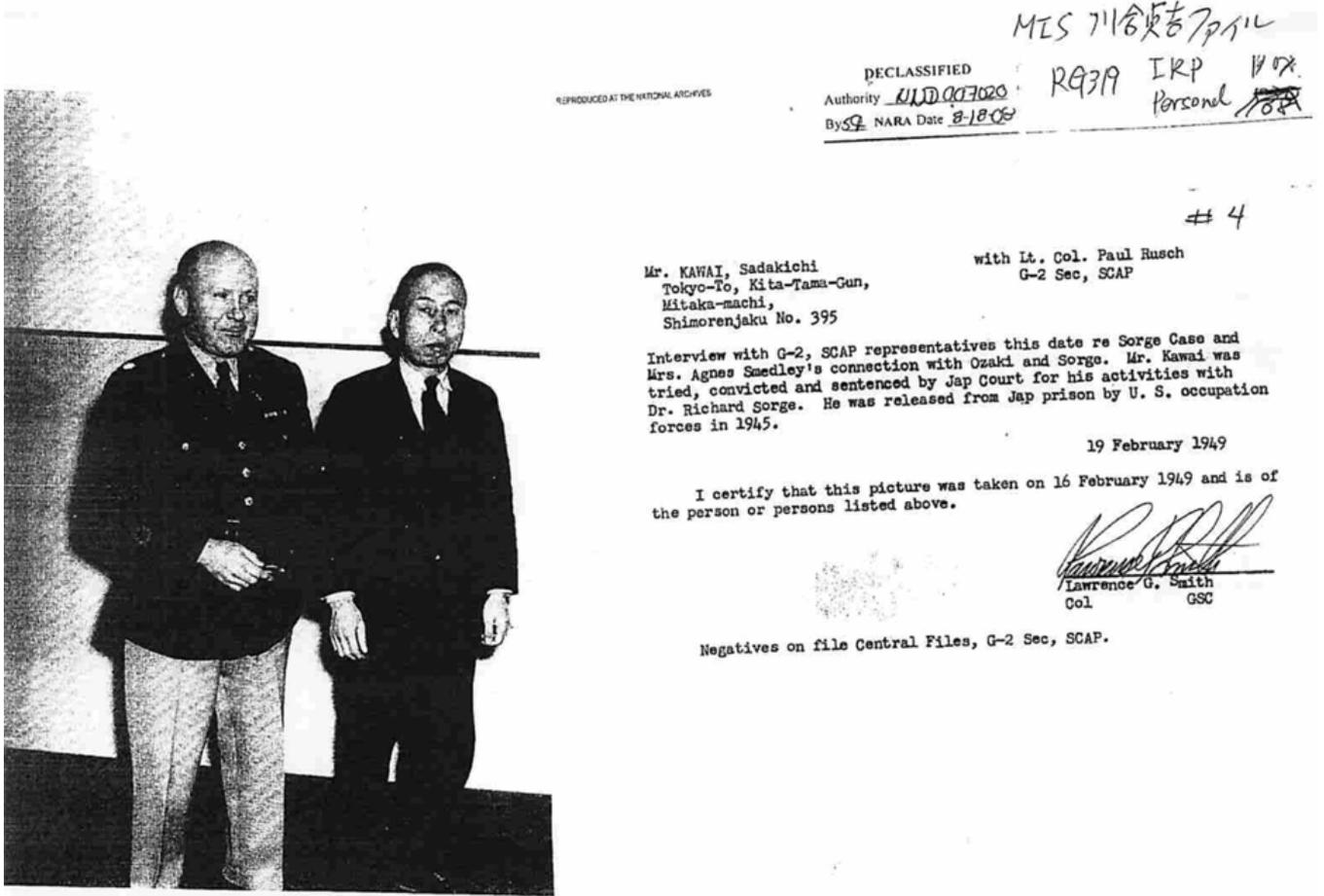


# GHQ/G2 ウィロビー=CIS ポール・ラッシュの諜報工作

## ーゾルゲ事件被告川合貞吉の場合

課題の限定[資料1]松本清張『日本の黒い霧』「革命を売る男 伊藤律」説の文藝春秋社改訂のもとになった記録=「ポール・ラッシュと川合貞吉」1949.2.16第1回尋問証拠写真



### 1 なぜ、ポール・ラッシュか？—Wikipedia に欠落した占領期諜報将校の顔

(Wikipedia)ポール・ラッシュ (Paul Rusch 1897年 - 1979年12月12日) は、アメリカ合衆国ケンタッキー州出身の牧師。親日家として知られ、日本に多くの業績を残し記念も多く残っている。インディアナ州フェアマウントで生まれ、ケンタッキー州ルイビルで育った。1923年の関東大震災後の日本のキリスト教青年会YMCA拠点を立て直すために1925年来日。ルドルフ・トイスラーを助け、聖路加国際病院の建設資金の募金活動も行った。また山間高冷地で米作に適さなかった清里高原 (山梨県北杜市) での酪農、西洋野菜の栽培促進による開拓支援を行った。1979年、聖路加国際病院にて82歳で逝去、遺骨は現在、清里聖アンデレ教会納骨堂に安置されている。

立教大学教授にもなった彼は1934年に東京学生アメリカンフットボール連盟を設立し、太平洋戦争の勃発に伴いアメリカ合衆国に強制送還され、アメリカンフットボールも敵性スポーツと判断されて中断されたが、戦後の1948年に再度来日し1948年に行われた第1回ライスボウルでは始球式のキックを行った。1961年には日本アメリカンフットボール協会から「**日本フットボールの父**」と称号をもらった。この業績を記念して1984年からライスボウルの最優秀選手にはポールラッシュ杯が贈られるようになった。

ダグラス・マッカーサーのGHQにも所属していた。春名幹男の著書によれば、**GHQ参謀第二部 (G2) の民間情報局 (CIS) に属し文書編集課長**をしていた。G2に残された石井ファイル (731部隊の石井四郎元中将の取調及び免罪工作に関与する文書) には、ラッシュの名前が記された文書が多数残されている。そのことから、春名は①ラッシュが[有末精三を使って46. 1. 6-] **石井四郎の免罪工作**に関わっていたと考えている。[以下wiki外=春名『秘密のファイル』は更に②CIS吉田追放メモなど**公職追放**37000人分個人資料収集、③**原田熊雄日記**発掘・翻訳 (『西園寺公と政局』里見弴・吉野源三郎)、④**澤田廉三・美喜夫妻**の麹町「澤田ハウス」**接收・使用**(CISハウス)、⑤吉田・白洲・松本重治・片山哲・森戸辰男・福島慎太郎らの**人脈解説**]

[井尻俊之執筆『ポール・ラッシュ伝』では、⑥**1926-42.4立教大学教授** (経済学・商業英語・ESS国際交流、17年間教え子2000人)、⑦**1938.7.24清里清泉寮** (澤田夫妻)・**39.3中国舌禍事件**「大陸復興を評価」、⑧**交換帰還船で帰国後**42. 11-45. 9. 10 **MIS** (陸軍情報部) **LS** (語学学校) で人事課長・日系2世ら教育、⑨**45. 9. 26-49. 7. 18 G2/CIS民間諜報局** (ソープ局長) **少佐就任・戦犯追放リスト作成**、⑩**46. 10立教大学視察**、**礼拝堂豚小屋に愕然とし全理事追放**ら11人**公職追放** (戦後初の大学追放)、⑪**45. 11. 16中佐昇任・CIS編集分課長**、**46. 5-ウィロビー少将** **直属24人の最高スタッフ**に、**編集分課は2世語学兵MIS/LS出身者71名**、**日本人長州一二ら**、**澤田ハウスで旧特高45798件、高級公務員56000人分履歴書、36773人個人記録、5724団体資料収集**、⑫**ウィロビー命令**で、**原田日記翻訳と共にゾルゲ事件再調査**、**スメドレー関与発見**、**ウィロビーに報告書**、⑬**46. 8全国中等学校野球大会復活・ラッシュ主賓**、⑭**1949. 1総選挙**で**CISは吉田茂の選挙に便宜** (自動車通行証・ガソリン供与)、**49. 7. 18退役[写真]**、**清里復興計画・日本聖公会復興・セントポールクラブ・立教奨学金等に専念**。⑮『1934フットボール元年』所収「日記」では「重要事項」に「**46. 1から日本共産党に関する情報収集**」]

(参考) 井尻俊之・白石孝次 『1934フットボール元年 父ポール・ラッシュの真実』 (ベースボール・マガジン社、1994年12月)

山梨日日新聞社編『清里の父 ポール・ラッシュ伝』 (山梨日日新聞社、2004年8月)

『日本聖公会一ポール・ラッシュ報告書』 (立教大学出版会、2008年4月)

財団法人キープ協会『清里に使いして一ポール・ラッシュが書き遺した奇蹟の軌跡』2003

Elizabeth Anne Hemphill, *The Road to KEEP: The Story of Paul Rusch in Japan*, New York and Tokyo: Walker/Weatherhill 1969、春名幹男『秘密のファイル』上下 (新潮文庫)

DVD長編アニメ「夢かける高原、清里の父 ポール・ラッシュ」キープ協会

[マッカーサーにとってのボナー・フェラーズが、ウィロビーにとってのポール・ラッシュ?]



沢田ハウスで開いたポール退役記念パーティ。左から  
ポール、吉田首相、ウィロビー少将、松平参院議長

## 2 GHQ/G2 (CIS局長兼務) ウィロビー少将にとってのゾルゲ事件

J・Y・キャノンの回想「私が最初にゾルゲのことを知ったのは、東京の焼けたドイツ大使館の中の金庫を爆破して開けた時でありました。私は金庫から出てきたドイツ大使館の極秘記録の中に、ゾルゲの名前が何度もサインされているのを見ました……私は日本の前特務機関の人から、ゾルゲは約1年前にスパイ罪で絞首刑にされたことを聞きつけた。」→クラウゼン夫妻を捕まえられず（延禎『キャノン機関からの証言』番町書房、1973.2序）

ウィロビーの公式報告（『赤色スパイ団の全貌』福田太郎訳、東西南北社1953, Shanghai Conspiracy 1952, マッカーサー序、ただし同内容の英国版は Sorge: Soviet Master Spy）では、

- ① 45.9GHQ設置後、政治犯釈放リストにマックス・クラウゼンの名、ソープ准将がソ連大使館を通じて逃がしてしまった。【ただしクラウゼン尋問のMISファイルあり】
  - ② 46年はじめCISのT・P・デイヴィス中佐が司法省パンフレットに基づく報告作成、ワシントンへ
  - ③ 47.12.15 CISのH・T・ノーブル博士の詳細な報告を、カナダ諜報事件（ソ連スパイ・グジェンコ事件）に関する米陸軍学校教材として空輸 cf. J.Mendelson, Covert Warfare, The Case of R.Sorge, 1989
  - ④ 49.2.10 米ロイヤル陸軍長官の要請で、CIS1947/12/16定期概要（デーヴィス＝ノーブル報告最終版）にもとづき公式発表（いわゆる「陸軍省発表」「ウィロビー報告」）、スメドレーの抗議で2.20報告発表拒否、「発表は一部広報部員の手違い」（ロイヤル2.27）。ウィロビーは「挑戦に応じ」52年著書に。
- 47.8.5付無署名CIS報告「The Sorge Case」（白井編『ゾルゲ事件資料集』2007）はラッシュ作では？

### 3 戦後日本のゾルゲ事件報道

① 戦後日本のゾルゲ事件報道は、尾崎秀実中心で、中西功「ゾルゲ事件の真相」(月刊読売 46.1.14)「愛情はふる星の如く」(人民評論 46.2)以降、悲劇の主人公。そのためゾルゲ事件も反戦平和活動・愛国者の筋で紹介。伊藤律は不在。川合貞吉(せき・すみとか名)『民衆の友』48.10-11もその延長上。11月号「上海の巻」のみが川合独自証言。

② そのもとで早くから、G2は特高以上に広くゾルゲ事件関係者をリストアップ・監視。MIS個人ファイルは尾崎秀実、川合貞吉、秋山幸治、田口右源太、宮西義雄、クラウゼン、リリー・アベク、リスナー、マイジンガー、オットのほか、特高記録にないジャック木元＝木本伝一、豊田[将月]令助＝矢野努・武田、石島栄、藤井周而がゾルゲ関連、ただし松本三益、堀江邑一、中西功、荒木光太郎はゾルゲ事件外の監視記録、野沢房二、ハンブルガ夫人＝ウルズラ・クチンスキー＝ソーニャ、陳翰笙ら関係中国人記録なし、ただし英国国立公文書館・上海工部局資料にゾルゲ、スメドレー、顧順章事件、ヌーラン事件記録。

(参照) 加藤HP <http://www.ff.ij4u.or.jp/~katote/curi.html#info>

「ゾルゲ事件の残された謎」(日露歴史研究センター『ゾルゲ事件外国語文献翻訳集』第19号、2008.6)

「ゾルゲ事件の新資料——米国陸軍情報部(MIS)『木元伝一ファイル』から」(日露歴史研究センター『ゾルゲ事件外国語文献翻訳集』第25号、2010.3)

「ゾルゲ事件の3つの物語——日本、米国、旧ソ連」(『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』第26号、2010.6)

「新発掘資料から見たゾルゲ事件の実相」(『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』第28号、2011.3)

「宮城與徳訪日の周辺——米国共産党日本人部の2つの顔」(日露歴史研究センター編・第6回ゾルゲ事件国際シンポジウム報告集『ゾルゲ事件と宮城與徳を巡る人々』2011.6)

### 4 MIS=IRR「川合貞吉ファイル」解説——全98頁、現物は時系列でなく乱雑 [資料3]

① (Wikipedia) 川合貞吉 かわいていきち 1901-1981 昭和時代の社会運動家。明治34年9月15日生まれ。昭和3年中国にわたり、上海で日支闘争同盟を組織。尾崎秀実(ほつみ)やゾルゲと知りあい、コミンテルンの情報活動に参加。16年ゾルゲ事件で検挙される[懲役10年]。戦後出獄後は著述活動に専念。[48.11 尾崎秀樹と共に尾崎・ゾルゲ事件真相研究会、日本民主主義文化連盟『民衆の友』48.10/11 せき・すみとか論文]昭和56年7月31日死去。79歳。岐阜県出身。明大卒。著作に「ある革命家の回想」[日本出版協同1953、「遙かなる青年の日々に」谷沢書房、1979]など。

② 1949.2.16 第1回 CIS ポール・ラッシュ中佐尋問前の川合貞吉資料

新聞記事 Japan Adviser Jan 21, 1937、人物カード 1947.9.8-以後多数

1947.9.10 履歴調査 日支闘争同盟、副島龍起・田中忠雄・水野成・日高為雄、1932年に尾崎の紹介でゾルゲ、スメドレーとスパイネットワーク、以後船越寿雄、日本で宮城  
1947.9.15 支那浪人、尾崎に金をせびる、宮城は川合を信用できないと言っている

1947.9.29 CISからCCD民間検閲局へ、川合のMater Watch List掲載要請(ゾルゲ事件関係者であると共に、共産党と再び結びつく可能性あり[資料4])

1948.7 再度詳しいファイル化つまり、川合は1949.2.10陸軍省発表前から監視されていた(45.10釈放時尋問記録は? 渡部氏は伊藤律『生還者の証言』により48.11キャノン機関接触説)

③ 47.8.5(国務省宛?) CIS報告の川合評価が47.9.15メモに、伊藤律発覚端緒説に否定的

## <1949(昭和24)年の出来事 川合供述・履歴書と対照>

第24回衆議院議員選挙(1月23日)民主自由党は前回選挙より133人も多い当選者を出して圧勝。社会党は片山委員長をはじめ党幹部が落選・惨敗。共産党躍進、吉田保守安定政権の始まり。伊藤律は社共同担当。[民主自由] 264 [民主] 69 「社会」 48 [共産] 35

1月25日 中国共産党が北京奪回。

2月11日 第5特別国会召集(2月16日第3次吉田内閣、5月31日閉会)

1949.2.10 ワシントンでのゾルゲ事件陸軍省発表、2月11日新聞報道 (プランゲ文庫参照)、

「ゾルゲ事件の全貌米陸軍省発表、日独の動き筒抜け」

「共産主義のシンパは容易にスパイになる、発表の目的(ワシントン)」

「反米活動のおそれ、政治犯で釈放された非重要人物」

「米国内の共産シンパに警告」「今なお暗躍?」

「首相言明避ける」「スメドレー女史否定」「私は無関係、スメドレー女史談」

「裏切った伊藤律、逮捕の糸口」「事件に無関係、共産党志賀氏」「伊藤関係は特高の作文」

「日ソ戦回避にスパイの動機」「ゾルゲは共産党万歳、尾崎は南無阿弥陀仏」

2月12日 「同じ組織は現存(ウイロビー幕僚部長言明)」 「国内になおスパイ団、世界の共産党はソ連の指令受ける」

2月13日 「共産党を警戒せよ、総司令部ウイロビー少将談」

2月14日 「ソ連対日活動に米人スパイ動員」

2月16日 第3次吉田内閣発足＝川合貞吉 G2 喚問

2月20日 「公式記録には不適當。米陸軍情報部次長談」

2月28日「ゾルゲ事件公表は失策、ロイヤル長官声明」

3月7日 - 日本、ドッジ・ライン(財政引き締め)実施。

4月4日 - アメリカ合衆国を中心に北大西洋条約を調印。NATO 発足。

4月23日 - 中国共産党軍、中華民国の首都南京を制圧。

5月12日 - ソ連、ベルリン封鎖解除。

5月20日 - 中国国民党、台湾に戒厳令施行。 <5.20 レイシー大佐・河辺機関の「タケマツ作戦」>

5月23日 - ドイツのうち、連合国(アメリカ合衆国、イギリス、フランス)により分割占領されていた、後の西ドイツに相当する3つの占領地域が統合される。

5月25日 - 通商産業省発足。 <ソ連抑留帰還最盛期 49年44隻 86938内「赤旗梯団」33隻>

6月 - 朝鮮労働党結成。

6月1日 - 公共企業体日本国有鉄道、運輸省から独立。

7月5日下山事件。7月15日 三鷹事件。8月17日松川事件。

8月26日 - シャウプを団長とするシャウプ使節団が、シャウプ勧告をGHQに提出。

8月29日 - ソ連が初の核実験に成功。

9月7日 - ドイツ連邦共和国(西ドイツ)正式に発足。

10月 - 湯川秀樹、ノーベル物理学賞を受賞。日本人初のノーベル賞受賞者。

10月1日 - 中華人民共和国成立。

10月7日 - ドイツ東部ソ連占領地区にドイツ民主共和国(東ドイツ)成立/東西分裂。

1950.1.6 コミンフォルムの日本共産党批判、所感派と国際派分裂、伊藤も「北京機関」へ

<1949. 2. 16 尋問-1951. 10. 1 解任までのファイル解読>

① 松本清張『日本の黒い霧』は、川合貞吉回想・尾崎秀樹説にもとづき、伊藤律を「GHQ/G2のスパイ」としたが、実は逆に川合貞吉こそ「G2 ウィロビーのスパイ」で、伊藤律を戦後共産党の「革命を売る男」に仕立て上げた張本人。

② ただし G2 の 49. 2. 16 川合訊問は 2. 10 陸軍省発表の 1 週間後、陸軍省発表は中国でのスメドレーの非米活動中心、日本のメディアが特高警察秘密記録からの伊藤律発覚端緒説に注目。川合供述は発覚端緒説ではなく GHQ のスパイという尾崎秀樹・松本清張説に影響。

③ 米国側の狙いは『ウィロビー回想録』新版（山川出版社、2011）に詳しくでてくる。GHQ/G2 ゴルゲ事件調査は、当時の国際的冷戦の文脈と米国内マッカーシズムの進展にあり（1947にはハリウッド・テン、48 アルジャー・ヒス、ウィテカー・チャンバーズ、50. 1 原爆スパイのクラウス・フックス）、ウィロビーの関心は、ゴルゲ事件そのものよりも、その利用によるスメドレー、スノーら親中派米国人の告発、占領政策では民主化を担った民政局 GS 要員の追い落とし。だから『ウィロビー回想録』には伊藤律はでてこない。

④ 陸軍省発表期の事実関係は、ウィロビー回想よりも尾崎秀樹『生きているユダ』（番町書房、1966）が詳しい。川合の 49. 2. 16 訊問は、2. 10 陸軍省発表、すぐにスメドレーの抗議、共産党志賀談話、読売太田耐造談話、2. 13 伊藤律否定談話、15 中西功談話のあとで、米陸軍省がスメドレー＝ソ連スパイ説について「証拠がない」と謝罪する直前、つまりウィロビーが本国に送った情報が根拠薄弱とされたので、G2 ウィロビーとしては、何としても日本官憲資料から作った筋書きを「証明」する裏付け証言をとらなければ面目丸つぶれになる局面での喚問。川合はスメドレー関与の「唯一の生き証人」の位置づけ。

⑤ 1949. 2. 16 の午前 9:54-11:36、一問一答でのラッシュュら 4 人による川合訊問。主題は、上海及び中国でのスメドレー、ゴルゲ、尾崎との関係、及び『民衆の友』48. 11 川合中国回想確認（せきすみたか名「銃に抗した人々（上海の巻）」）。伊藤律ほか日本共産党関係は全く聞かれていない。川合は自分の尾崎への協力や検挙事情を語ろうとしたが、ラッシュュから「あなたのことは、あなたとスメドレーとの関係ほどには関心がない」といわれる一節が象徴的なように、当初 CIS は伊藤律端緒説や日本共産党の内部問題に関心を持っていない、川合は米国議会非米委員会に喚問する「中国でのスメドレーの生き証人」扱い。米国側にとって肝心な部分は、『民衆の友』48. 11 月号 pp. 38-39 掲載のゴルゲ、尾崎、スメドレー、川合の 4 人の会合場面[資料 5]の一言一句が正しいかどうかの証言。川合は一般尋問で「スメドレーとはそれ以前に 1-2 回しか会ったことはなく、それほど親しくなかった」「雑誌の記事はたいてい事実だが一部は小説形式のフィクション」「自分は党员ではない」と正直に答えてしまったが、4 者会談にはすべて yes（木下順二「オットーと呼ばれる日本人」の舞台、渡部富哉はちきゅう座論文「川合貞吉の供述と著作『ある革命家の回想』とスメドレーに関するアリバイの実証的研究」で 4 者会見そのものをフィクションとする <http://chikyuzo.net/modules/news2/article.php?storyid=153>）。

G2 ラッシュュがもう一つ聞いたかったのは、ウィロビーが上海のスメドレー・ゴルゲ・尾崎グループのキーパーソンと考えた日本人「鬼頭銀一（きとう・ぎんいち）」との関係（英文は Ito Kinichi、尾崎供述ではゴルゲと尾崎を結びつけたのはアメリカ共産党员鬼頭、ゴルゲが強く否定し判決はスメドレーで統一）。川合は「鬼頭銀一」を知らないので訊問打ち切り。この日の協力謝礼はタバコと食糧のみだが、川合は自ら協力を約し、「協力的」と評価された。

最後にポール・ラッシュとのツーショット写真等4枚の写真を取り署名、米国議会非米活動委員会でも証言・証拠として使えるように誓約[冒頭写真]。

⑥ CISは2.16川合尋問後、司法省川合・尾崎訊問記録と照合チェック、特に尾崎の後継者を船越寿雄と証言したことを重視し、以後2月18/20/23/25/26/28日など、G2=CIS及びその指令を受けた日本の警視総監田中栄一、通訳日野調査員らによる川合のヒアリングが行われ、1年後の50.2.20に川合情報の価値がG2内で疑われて月2万円(55ドル)を月1万円へと手当が引き下げられる[資料2]まで、秘かにCIS(民間諜報局本部、第一生命ビル)、CISハウス(澤田邸)から本郷ハウス(旧岩崎邸、キャノン機関)に身柄を移管、月2回報告義務、証言を重ねる。ただしキャノンによる尋問の詳細はIRR川合ファイルにはなし。

米国側は本国議会非米活動委員会に喚問可能な親中派米国人の非米活動の証人として、川合の身柄を確保しておく必要があった。ただしスメドレーが50.5.6にイギリスで死去し川合証言の価値は半減、マッカーサー解任後の51.7.30に、2ヶ月後の支給打ち切り決定、ウィロビー退役・帰国の51.10.1正式にG2から解任された。

⑦ G2情報提供者としての川合の手当受け取り額は、49.2月1万円(この年銀行員大卒初任給3千円)、49.3-50.2まで月2万円12か月で24万円、50.3-51.9は月1万円18か月で18万円、総計43万円、プラス毎月食糧パック・タバコ(ラストボロフ事件の外務省日暮信則はソ連から49年月35000円、G2地理課志位正二49.2-54月給25000円、51.10-1回15000円でG2情報を提供)。

⑧ 日本共産党情報は元特務機関員、佐野学・鍋山貞親、シベリア抑留帰還スパイ等から入るためか、当初は米国側は期待しておらず、川合貞吉の方から売り込んだ。G2ウィロビーらは川合のスメドレー・中国情報がきわめて重要と判断し、2.17から田中栄一警視総監とCIC(441防諜部隊)による三鷹の川合自宅=尾崎秀樹と同じアパートの24時間防衛警護体制をとった(当初川合は「不要」と言ったが米国側が監視を兼ねて警護)。

一方川合の方は、2.16尋問で「スメドレーとはそれ以前に1-2回しか会ったことはなく、それほど親しくなかった」「党員ではない」と正直に答えてしまった後ろめたさもあり、自分の情報の価値を高めるため、護衛警備にやってきた田中栄一警視総監に「自分はまだ共産党シンパで発表雑誌は左翼系」「伊藤律こそ共産党の裏切り者 traitor で尾崎処刑に責任があり、自分は伊藤律の破滅 damnation のために働きたい、しかし自分の米軍や警察への協力証言が発表されると伊藤律や共産党から生計手段を奪われる」と訴える[資料6]。

田中栄一報告を討議したCISの2.23警護会議で、米軍は「伊藤律が川合を殺そうとするおそれ」から川合の身柄を隔離し、本郷ハウス(旧岩崎邸)=キャノン機関に移すことを決定、しかし突然いなくなると三鷹の共産党や同じアパートの尾崎秀樹から怪しまれるので、3月4日に妻子を妻の実家である四国に帰し、川合のみ本郷ハウスに移した。その過程で、川合は日本共産党情報を次々に提供し、自分と家族の生活のために月2万円と食糧配給を要求、米国側もこの要求を飲む(ポール・ラッシュは2.25に予算3万円準備)。

⑨ この間、49.2.25に、川合は、尾崎秀実伝記編纂委員会の陸軍省発表後解散の経緯、尾崎夫人・娘は党員で夫人は伊藤律と愛人関係 love affairs だろう、日本共産党の徳田球一・伊藤律はゾルゲ・尾崎の反ファッショ・反ナチ活動や共産党との関わりを認めず、川合の『民衆の友』第3論文掲載を禁じたので川合は憤慨していると情報提供[資料7]。

2.26CIS日野調査員に川合は「党中央委員伊藤律と松本三益はゾルゲ・リングに間接的

に関わっていたのに川合・船越・尾崎と違って罰せられなかったことを憤っている」「ゾルゲ事件についての中西功との討論」の内容等を述べ、昼食・タバコ・現金1万円受理。

⑩ 2.28には「共産党はゾルゲ事件をあまり重視していない」ことに憤り、川合は「松本三益がゾルゲ・リングにはより緊密に関係しており、尾崎を『売った selling out』ことでは伊藤律よりも責任あり」「自分の妻子を実家に帰しての生活に月2万円必要」「もしもゾルゲ事件の調査がうまくいくと、日本共産党内に意見の相違 dissension が生まれ党指導部の交代を導くかもしれない、ただしそれは外からの圧力によってではなく党幹部のなかからでなければならない」「自分の考えでは、現在の党指導部は、野坂を例外として共産主義者というよりファシスト」「共産党は問題をわかっていないので自分の身柄は今のところ安全、ただし2.16に自分が喚問されたことは知られている」等[資料8]。これら川合証言裏付けのためCISは2.28にゾルゲ事件被告秋山幸治を喚問、秋山は川合をよく知らず。

⑪ 川合の家族が四国に行き川合が本郷ハウスのキャノン機関に保護・監視された49.3.4から、訊問が一応終わり家族が三鷹市下連雀に戻った4.19まで1か月半が、本格的なキャノン機関への情報提供。ただしその記録はファイルではごくわずかで、34年スメドレーが来日し尾崎訪問、37年クラウゼンと連絡のため新潟訪問の噂くらい[資料9]。4.19には用済みで帰宅が許された。日本共産党情報はCISポール・ラッシュではなくキャノン機関、田中栄一警視総監らが関心を持って聞き取った。ただし川合一家の監視は続けられ、川合の身柄を共産党や他機関に渡さないため月2万円は支給。日本共産党は、川合のゾルゲ事件情報によってではなく1950.1コミンフォルム批判で分裂・自滅したため、川合の戦前伊藤律・松本三益情報は米軍・日本警察にとって重要ではなくなった。そこで50.2共産党内部に情報源をもたない川合は月1万円に減額、50.5.6スメドレーの死でマッカーシズムの米国喚問用にも意味が薄れ朝鮮戦争期の諜報に直接役立たず。マッカーサー・ウィロビー解任で51.9月末縁切りに。この前後厚木基地CIA対中特務養成機関講師（春名下、律証言）。

## 5 MIS=IRR 川合貞吉ファイルの語ったもの、語らなかったもの

- ① ウィロビー、CISポール・ラッシュの関心は、陸軍省発表でミソをつけたアグネス・スメドレーの非米活動を証言しうる唯一の生き残り、川合貞吉の具体的供述をとること。それを米国議会非米活動委員会で証言させること。そのため『民衆の友』の4者会談確認。
- ② 米国での非米活動委・マッカーシズムのためのGHQ・G2の役割[資料10]。CISもZ機関も歴史課（プランゲ、荒木光太郎・光子夫妻、河辺・有末・辰巳・服部機関）・地理課（志位）もウィロビー直属で、CCDやCIC441支隊および日本警察はその手足に使われた。
- ③ 日本特高のストーリーである伊藤律発覚端緒説補強は、川合の方からCISラッシュに持ち込まれ、キャノン機関に移管された。川合は松本三益も挙げたが当時の日本共産党攪乱効果からウィロビー・キャノン・田中栄一は伊藤スパイ説を利用した。プランゲ1967はウィロビー報告踏襲。真実解明はC・ジョンソン1964、伊藤律帰国80、渡部富哉93へ。
- ④ したがって「革命を売った男」は川合貞吉。尾崎秀樹も松本清張も日共も踊らされた。
- ⑤ ウィロビーのゾルゲ事件探索は日本特高・検察より広域で徹底的。公式報告はごく一部で石島栄・藤井周而・豊田令助らに及び、FBIフーバー、ニクソン、ケナンに情報提供。鬼頭銀一、野沢房二、日高為雄、ソーニヤ（原爆スパイ・フックス獲得）らには及ばず。